

文化復興の資源としての博物館の展示と収蔵品
—台湾の小林平埔族群博物館を中心に—

Regarding Museum Exhibition and Collection as Resource of Cultural Revitalization:
A case of Xiaolin Pingpu Cultural Museum in Taiwan

呂 怡屏¹
LU Yiping

キーワード：平埔族、タイヴォアン人、博物館展示、文化復興、民族アイデンティティ
Keywords：Pingpu indigenous, Taivoan people, Museum exhibition, Cultural
revitalization, Ethnic identity

1. はじめに

本稿では、台湾における被災地域の復興支援の中で、特に博物館と被災地域とが連携して文化復興を進めた事例に着目し、博物館が被災地の文化復興に果たす役割を明らかにするものである。

具体例として、2009年8月9日に台湾の南部地域を中心に甚大な被害をもたらした「莫拉克風災（モーラコット水害）」（以下八八水害）の後、被災した高雄にあるシラヤ系平埔族であるタイヴォアン人が暮らす小林（シャウリン）村の復興の過程を取り上げる。

小林村は大規模な土砂崩れにより、村全体が15メートルもの厚みの土砂の下に埋没するという未曾有の被害を受けた。その結果、村民512人のおよそ9割にのぼる474人もの命が失われた。こうした甚大な被害は、地域で受け継がれてきた民族文化の消滅という危機的状況を生み出した。そうした中、本来は文化遺産の保存・研究・展示・教育という役割を担っている博物館という存在が、被災地の復興に対していかに貢献できるかという問題が浮上し、人々の関心が高まっている。

本稿では災害の発生後、小林村に新しく設立された「小林平埔族群博物館」を例として、博物館が被災地の文化復興に果たす役割について考察し、小林博物館の設立過程に注目しながら、現地住民と博物館との連携の重要性を検討するものである。

台湾はその地理的条件から、地震、台風、水害などの自然災害に頻繁に見舞われてきた土地である。近年台湾では、自然災害と博物館との関わりにおいて、様々な動きが見られるようになった。そのきっかけとなったのが、1999年9月21日に発生した「集集大地震」（以下921大地震とする）である。大規模な自然災害が発生し、それによって甚大な被害が生じると、台湾各地の博物館は、文化財や民具の救出とコミュニティの再建に積極的に関わりはじめるようになった。例えば、国立台湾歴史博物館準備室（現在の国立台湾歴史博物館）、

¹ 総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻 博士後期課程

国立歴史博物館、国立自然科学博物館などは被災地にある倒壊した歴史的建造物を修復し、建造物内の器物の救出と修復を行った。さらに、文化財救出の過程と文化財修復の状況を一般市民に広報するため、博物館館内に災害に関する展示スペースを設け、同時に教育活動を開始した。

これらの活動は災害後の地域復興のプロセスの中で、文化遺産の保存、研究、公開、さらに教育といった役割を担う公共的な存在である博物館の役割として注目されてきた。各博物館では、自然災害のメカニズムの解明、災害が人間社会に与える影響の研究、あるいは文化財の救出に取り組んできたが、文化の守り手としての役割を担う博物館には、災害によって影響を受けた文化を伝承する場としての役割も新たに求められるようになったのである。

災害発生後における博物館の文化復興の動きに関する研究と報告を見る限り、博物館は概ね2つの役割を果たすことができると考えられる。第一に、災害が発生した直後に、速やかに対応部署を設置して文化財や民具の被災状況の調査をおこない、文化財を救援し、記録や整理などの応急措置をおこなう（日高 2011:7）。第二に、そうした文化財や民具の価値、由来、地域に果たしてきた役割などを調査、分類したうえで保存し、一般へと周知する。一方では、災害そのものをテーマとした展示の開催がある。展示される文化財や民具とそれらにまつわる物語は、被災した地域の歴史・文化を人々に再認識させ、また災害の記憶を伝えるという役割を担う。また、文化財や民具を通じて人びとの中によみがえる生活の記憶は、被災者が自らの社会の中で置かれていた位置を再認識し、改めて地域を再生する際の大きな動機づけとなる（小池、葉山 2012:238-239）。さらに、いつか再び襲ってくる災害への防災対策を考えるきっかけにもなると考えられる（日高 2015:45）。

本稿では、まず1999年に発生した921大地震の後、博物館が関わった文化財や民具救出活動と「921地震教育園区」の設立過程について具体的に記述する。次に、前述した八八水害以降のタイヴォアン人の暮らす小林村のコミュニティ再建、およびそのコミュニティ再建計画の一環となった小林平埔族群文物館²が設立されるに至った経緯を示す。小林平埔族群文物館へのタイヴォアン人の歴史的な手工芸である刺繍の頭巾と肩掛けの出展は、新たな刺繍工芸品が製作される契機となった。このような博物館への手工芸品の展示が、村民の民族的意識を高め、さらに彼らの一体感形成へと貢献した点についても言及する。

2. 台湾における自然災害をテーマとした博物館の設立

台湾の博物館関係者は1999年の921大地震以降、博物館がそれまで担い、実践してきた事業—文物の保存、展示、教育など—とは別に、新たに生まれた社会的課題との関係を改めて考えるようになった（王 2003:147）。921大地震をきっかけとして、自然災害に関する知識、防災や減災の重要性を伝えるため、博物館によっては常設展示を設けたり、また、特別展示を通じて災害に関連する課題を提起したりする動きがみられた。

921大地震とは、1999年9月21日1時47分、台湾中部の南投県を震源として発生した

² 台湾の博物館法で「博物館」の定義は、明確な設立者と管理者がある非営利の機構である。また、博物館運営に関わる仕事を担当する常勤スタッフがおり、年中200日以上開館する機構である。したがって、上記の条件を満たす「文物館」、「美術館」、「記念館」、「水族館」、「動物園」、「植物園」や「水族館」は博物館と見なされる。

マグニチュード 7.3 の大地震である³。この地震による死者は合計 2455 人、8 万 4 千棟あまりの家屋が全壊または全半壊し、経済的損失は 3 千 6 百億台湾ドルに上り⁴、台湾社会に大きな衝撃を与えた。震災直後の捜索活動が段階的に終了した後、次第に、文化財や民具などの救出・保護活動が開始された。倒壊した歴史的建造物や文化財などの救出、分類、修復は、台南に位置する国立台湾歴史博物館準備室（現在の国立台湾歴史博物館）や台北の国立歴史博物館でおこなわれた。また、その他の博物館などでも特別展示やシンポジウムが開催された。

これらの動きの中で、震源地の南投県の近くの台中市にある国立自然科学博物館は災害後の自然環境への影響の調査や、自然災害についての教育事業を進めた。その後、2000 年には台湾政府教育部の指導により、同館は 921 地震教育園區の企画立案を担当した。921 地震教育園區が設置された場所は元の台中県霧峰郷光復中学校の敷地であった。ここでは断層帯が横断しており、来訪者が断層そのものと震災によって倒壊した校舎も見学できることからこの場所を教育園區の設置場所として選ばれた。

2004 年に開館した 921 地震教育園區の目的は、921 大地震により被災した建築物を保存し、さらに被災地の人々の生活と密接に関わりのあるモノを収集することによって、自然科学的考察・生活文化保存の役割・歴史的事実の記録という 3 つの観点から展示と教育活動を進めることにある。地震発生のメカニズム、地震と生活の関係を展示することで、来館者に防災意識と人間同士の助け合いの重要性を伝えようとしたのである。

上記の目的に対応し、921 地震教育園區の展示は、1) 活動している断層—「車籠埔断層保存館」、2) 「耐震建築技術教育館」、3) 地震の揺れる力や地震の時の環境を体験する「映像館」、4) 「防災教育館」、5) 助け合う人々の様子と物語を表す「復興記録館」（重建記録館）という 5 つのパートに分けられた。

来館者は、まずは屋外の活断層が走る運動場および、被災して激しく損壊した校舎から見学し、次いで室内の展示館に入るといった順路をたどる。こうした順路を通じて、来館者は実際に起こった地震に関する記録と、地震という現象に関する自然科学の知識や、人々の暮らしに与えた影響といったものを、現実的なものとして理解することができるような工夫がなされている。それによって、確かな防災意識を抱いてもらい、地震が起きた際に果たせるはずの、個人の安全確保もできるようになると考えられた（陳 2013:93-94）。

こうした 921 大地震に関する博物館の一連の動きを契機に、台湾では災害に関わる博物館の設立や展覧会が徐々におこなわれるようになった。921 地震教育園區以外にも、2000 年の 921 大地震の被災地である南投県にある桃米村には震災記念館が設立され、また、2013 年には地質学に関する知識を広めたいとの企図から、921 地震教育園區の近くの竹山鎮に車籠埔断層保存園區も開園された。

中央政府が自然災害をテーマとする博物館を新たに設立する一方で、一般の博物館は震災の翌年に国立歴史博物館でおこなわれた特別展「抢救文物—921 大地震災區文物研究展（文化財の救出—921 大地震の被災文化財をめぐる研究）」（2000 年）、国立台湾博物館で

³ 「中央気象局 地震測報中心（中央気象庁 地震予報センター）」の公式サイトを参照する。
<http://scweb.cwb.gov.tw/special/19990921/1999092101471273043.htm>

⁴ 「921 網路博物館」（921 インターネット博物館）」の公式サイトを参照する。
<http://921.gov.tw/edu/edu-commonsense.html>

開催された特別展「天旋地轉－認識臺灣天然災害特展(台湾の自然災害を知る)」(2009年)のような、様々な特別展示や企画展示を催した。

その他にも、国立自然科学博物館では、特別展「地動驚魄 921－集集大地震專題展示(921集集大地震特別展)」(1999年)、「921災後家園重建特展(921災害後の生活再建特別展)」(2000年)、「台風來了(台風が来た)」(2011)、「變動的地球與防災科技特展(変動する地球と防災技術特別展)」(2011)、「震儀天下－921十五週年地震儀觀測歷史演化(震儀天下－921十五週年 地震の觀測の変遷)」(2014年)などが相次いで開催された。

921大地震発生15年周年にあたる2014年には、台南にある国立台湾歴史博物館で「島嶼・地動・重生:921地震十五周年特展」という特別展示が開かれた。国立台湾歴史博物館は以前から災害と人の生活について関心を払い続けており、震災後の人々の助け合い、生活の復興、および人と自然環境の関係を焦点に当て、921大地震を振り返るとともに、その地に今も暮らしている人々に関する物語を生き生きと展示した。

3. 「八八水害」後の博物館の動き

3-1 小林村の自然環境と八八水害による被害

1999年の921大地震の発生後、台湾にもっとも大きな被害をもたらしたのが2009年の「八八水害」である。2009年8月7日、モーラコット台風が台湾を襲った。翌8日から9日にかけて台湾中南部や東部には豪雨が降り続け、その結果、台湾の南投、嘉義、台南、高雄、屏東、台東など6つの市や県が土砂災害など大きな被害を受けた。これらの地域で八八水害により、深刻な被害を受けた原住民族の村は約90ヶ所にのぼる。

この地域に含まれる高雄市の山岳地域にある荖濃溪と楠梓仙溪流という川の流域にある桃源区、六龜区、甲仙区と杉林区では、とくに大規模な水害や土石流が発生した。このため、シラヤ族およびシラヤ系のタイヴォアン人の生活と文化の存続は危機的な状況に瀕した(行政院莫拉克颱風災後重建推動委員會編著2010:4-5)。本稿で取り上げる高雄市甲仙区小林村は、その中でももっとも甚大な被害を受けた地域である。

小林村は、シラヤ系のタイヴォアンに属する一群の人々が多く暮らしてきた村である。高雄市北東部の甲仙区に位置し、玉山山脈と阿里山山脈に挟まれて、楠梓仙溪の左岸に位置する細長い形をした沖積地に立地し、村の周辺は山林に囲まれている。かつての小林村はタイヴォアン人の主な居住地域である小林集落⁵のほか、五里埔集落、南光集落、錦地集落および埔尾集落とで構成されていた。かつて村民は狩猟採集とわずかな面積での農耕を生業として生計をたててきた。村の居住地域や家並みは、すべて日本統治時代に築かれたものである。日本統治時代、クスノキを伐採する労働者の生命を山岳系原住民族のツォ族やブヌン族から守るため、周辺のタイヴォアン人を伐採労働者の家の外回りに集中的に移住させた。中華民国政権になって以降には、漢族系の人々も小林村に移住してきた。村の両端に築かれた土地公廟という、土地を守る神さまを祀っている漢族の祠が村の境界となり、また村の中心には住民の崇拝する神を祀る北極殿と呼ばれる廟があった。長い間、小林村は山間部の非常に不便な村であったが、1983年に20号省道が敷かれるとともに、公共インフラの整備と

⁵ 本稿において小林村は小林集落のことを指す。

シラヤ族の文化にスポットを当てた町づくり⁶が徐々に進められてきた。住民の大部分は台湾原住民族であるシラヤ系のタイヴォアン人だったからである。タイヴォアン人は他とは異なる独自の生活文化を継承してき人々だが、現段階では政府によって公的な原住民族として認められていない。

2009年8月9日朝6時8分に発生した、村の背後にそびえる献肚山からの大規模な土砂崩れにより、小林村は完全に土石流に呑み込まれてしまった。当時の小林村の人口は約500人で、生存者はその約十分の一にすぎなかった。災害救助と生活の再建活動が進むにつれ、中央政府は被災地の実情と世論の高まりを考慮し、「災害前までシラヤ系の生活様式をよく保ってきた村民の新しい居住地で博物館を設立することにより、平埔族文化が復興できるのと同時に、一般の人にも平埔族の歴史や文化を理解してもらいたい」（李 2010）として、小林村を台湾南部の平埔族文化の復興拠点として選定した。

3-2 小林村の復興計画

八八水害が起こった後、中央政府、地方政府、文化部と各分野の研究者は水害に対して様々な活動を起こした。まず、台湾の中央研究院が主催した「気候変動、国土保育と台湾原住民族の社会文化の未来」会議⁷で、研究者たちは気象分析、政策立案、民族対策といった3つの側面から、未来へ向けての備えを考える長期的な調査計画を発表した。災害後まだ間もない、8月16日にはタイヴォアン人の文化がこのまま消失してしまうことを危惧した学者たちが集まって、「小林平埔原住民族文化重建協會」（小林平埔原住民族文化復興協会）を立ち上げた。

さらに、同年10月29日には、同協会と国立台湾博物館とが協力して、今回の災害被災者、政府関係者、学者を集め、「南台湾平埔族文化再建シンポジウム」を開催した。このシンポジウムでは、平埔族文化の保護や復興、救災、災害の責任追及、法律の整備など各方面に関して学者から批判や提言がなされた（林 2011:28）。

同時に、平埔族に関する研究資料と収蔵品を所有する博物館側も文化財の保存と復興のために動き始めた。文化建設委員会⁸を代表して「小林平埔文化重建計画」という文化と生活の再建の計画を担当したのは国立台湾博物館であった。国立台湾博物館はシラヤ族に関する資料を所蔵するほかの機関と連携しながら、小林村のシラヤ族タイヴォアンの人々に対してのインタビュー調査をおこない、災害後の復旧をテーマとしたシンポジウムを開催し、さらに小林村のシラヤ族タイヴォアン人の文化をテーマとした「小林平埔文化」特別展示を、2009年10月30日から2010年1月31日の間に開いた。

一方、旧小林村周辺の90戸の恒久住宅－「五里埔小林」コミュニティに関する建設計画である「高雄県甲仙郷五里埔開発案」に、「平埔族文化園區⁹」建設の企画が盛り込まれた。

⁶ その内容は祖先を祭る場所とする公廨（コンカイ）やシラヤシアターなどである。

⁷ 八八水害が起こった直後の9月1日に、中央研究院でシンポジウム「気候の変遷、国土の保全と台湾原住民族の社会文化をめぐる未来」（気候遷遷、国土保育與台湾原住民族的社會文化願景）がおこなわれた。原住民族を遷移すること、国土を利用することなどに議論された。シンポジウムの概要は下記のサイトにのせている。<http://www.ianthro.tw/p/5735>を参照する。

⁸ 現在の文化部、日本の文部科学省に当たる。

⁹ ここでの「平埔族文化園區」はタイヴォアン人の生活文化を保護する特区を指す。

同園区には、平埔族群博物館、平埔族の信仰の中心となる公廨、展望台¹⁰などの施設が含まれることになった。

五里埔小林と同じように台湾の赤十字会が杉林区に建設する日光小林コミュニティには120戸の住宅が建てられた。このコミュニティは元の小林村から40キロ程離れていて、文化的なものをテーマとした商品開発に力をいれており、伝統色の濃い五里埔小林コミュニティとともに小林文化を盛り上げている(林 2015:192)。さらに、大愛園区には60戸あまりの小愛小林コミュニティもある。

一方、旧小林村に関する歴史資料の保存と、同村に関する映像を記録するための調査は主に以下の3点を軸として進められた。1つ目は、国立台湾歴史博物館が高苑科技大学教授の簡文敏に依頼した「小林文化史料保存と映像記録計画」であった。2010年6月までに、小林村に関する古い写真と災害当時の写真が、約1200枚収集された。現地の様子を撮影したフィルムは108本があり、平埔族の生活用具227件¹¹が収集された。2つ目は、中央政府管轄の原住民族委員会内に「平埔族群事務推動チーム」が結成されたことにより、研究者たちが平埔諸族の集落の現状や人口など全国レベルの調査プロジェクトであった。そして、小林平埔原住民族文化復興協会は文化部の文化資産総処からの「高雄県楠梓仙溪・荖濃溪沿岸の原住民族文化資源調査と映像記録プロジェクト」の委託を受けた(林 2015:192)。

こうして、将来にむけて、シラヤ系タイヴォアンの人々の生活と文化の復興、および小林平埔族群博物館の展示に用いられる資料が集まっていった。その後、小林平埔族群博物館の展示企画は、高雄市立歴史博物館が担当することになった。

4. 小林平埔族群博物館の展示にいたる経緯

4-1 小林平埔族群博物館ができる前に

災害が発生する以前にも、小林村にはすでに展示施設が作られていた。平埔族のなかにも民族アイデンティティの意識が強まった1990年代の後半に、高雄地域では平埔族の文化を復元する活動が、研究者たちの協力によっておこなわれていたからである。小林村では、1996年に、民間の研究者である劉還月と当時の小林村の長老であった王天路、周坤文が、小林小学校の教室を展示室として「小林平埔族館」を設立した。小林平埔族館の設立目的は、地方文化の教育、および平埔族の文化復興への意識を喚起することであった。展示では竹製の建物、祭礼台、および竹・木製の農具や狩猟道具などが展示され、以前の生活の様子が再現された。しかし、この展示室は八八水害により小林小学校とともに土石流の下敷きとなってしまった。

2009年の八八水害の後、小林平埔族群博物館の常設展示が公開されるまでも、2つの臨時の展示会がおこなわれた。1つは2009年10月30日から2010年1月31日まで、旧甲仙郷地方文化館で開催された「小林平埔文化特展」である。この特別展示は甲仙郷地方文化館の2階でおこなわれた。企画者は長年にわたって小林村で調査活動をしてきた高苑科技大学教授の簡文敏である。この特別展示が制作された経緯は、災害後、被災した村民が

¹⁰ 公廨はタイヴォアン人が祖先を祭る場所であり、展望台とはかつて村の周囲の状況を監視するために立てられた見晴台だった。

¹¹ 大部分は老人により再製されたものである。

ねに過去の生活を思い出し、懐かしんでいたことであった。そのため、展示においてはタイヴォアン人の変遷の歴史とかつての居住地の紹介、日本統治時代に起こした抗日事件、かつての生業、信仰と夜祭、被災と復興がテーマにされた。

2 つ目の臨時展覧会は小林村の村民と研究者が共同企画し、2012 年から 2013 年にかけて開催された、小林村に関する資料の収集成果の展示である。そこでは、関連資料を収集するプロセスそのままに小林村の文化復興の動きとも足並みが揃った活動になっているとの認識のうえから展示が作り上げられた。展示会場は 2011 年に竣工した小林平埔族群博物館の一階であった。展示内容は、かつての中心街の再現、また当時の生活の様子に焦点が当てられた。展示物の一部は村民の手づくりの竹製の生活道具であった。企画者の簡文敏は、下記のように述べている。

「生活道具を再製作することを通じて、かつての生活の様子が再現され、災害によってもたらされたトラウマが癒されると考えた」（簡文敏 2016. 5. 8）。

小林村の文化を継承するために、かつての生活様式や記憶を博物館などの空間を利用して展示したことだけでなく、博物館に収蔵された音声資料も活用された。2010 年に五里埔に建てられた臨時公廨でおこなわれた太祖夜祭という神様を感謝することを目的として祭祀をおこなった際には、祭儀で使用された歌は 1930 年代に浅井恵倫教授が採集した録音を引用したものである。そのときには、東京外国語大学 AA 研が保管する夜祭の録音と調査ノートが、小林村の村民が祭典の奥義としてきたものを再建する際の根拠とされた（林 2011:29）。

4-2 小林平埔族群博物館と小林村の人々との協働

水害から三年目を迎えた 2011 年に、すべての旧小林村の村民は臨時に建てられた仮設住宅から、新たに建てられた恒久住宅に引っ越した。村民は五里埔小林、日光小林、小愛小林という 3 つの恒久住宅のコミュニティに分かれて住むことになった（高雄市歴史博物館 2014:30-31）。小林平埔族群博物館は、旧小林村に隣接する五里埔の開発計画の一環として整備された「平埔族文化園區」内に新たに建てられたものである。

2013 年に始まった小林平埔族群博物館の常設展示の企画プロジェクトは、高雄市立歴史博物館と八八水害後に 3 ヶ所に分かれて居住するようになった小林村の村民たちを中心として進められた。

小林平埔族群博物館は、「かつての小林村に長年にわたり受け継がれてきた平埔族文化を再現することにより、あらためて平埔族文化の歴史的・文化的価値を示すことである」（高雄市政府文化局 2014:3-8）という方針のもとに設立された。高雄市歴史博物館のキュレーターは、当初、専門家や研究者の意見に基づいて同館の展示を企画したが、かつての小林村は土石流の下に完全埋没してしまい、祭祀や生活に用いられていた道具などは残されていなかった。そのために、キュレーターは村民へ聞き取り調査をすることにより、展示内容の重点を単なる村の歴史や文化の紹介に置くのではなく、現地住民の声を反映させ、当事者である彼らが望む内容を作り上げていくことに方針を転換した。

展示を企画するため、高雄市立歴史博物館のキュレーターは、一年という時間を費やして

文献調査を実施したほか、被災後に3つの村に分散して移住した旧小林村の住民を対象として小林平埔族群博物館に対して何を求めるかについて、聞き取り調査を進めた。最初、3ヶ所別れて暮らすことになった村人たちの意見と、博物館に協力しようという態度とは、それぞれに違っていた。しかしながら、そうしたなかでも「昔の小林村のメインストリートが懐かしい」という思いは、多くの人びとに共有されたものであった。そこで博物館のキュレーターは「家に帰ろうー小林村の物語」という展示タイトルを思いつき、小林村の由来、生業の道具、宗教信仰の儀式など昔の生活の様子を再現することによって、村民たちの郷愁の念を反映させた展示の構成を立案した。

「家に帰ろうー小林村の物語」の展示では、旧小林村の中心街路である忠義路の道沿いをプロローグとして再現し、村人たちがお互いの家を気軽に行き来し、また来客を歓待する習慣があった、というかつての生活の様子を表現した。このことは、村人が3ヶ所に別れて暮らすようになってしまった現在、3つの村の関係も薄れて、忘れ去られようとしていたことの1だった。



写真1. 入口



写真2. 家族食卓

5. 小林平埔族群博物館の展示内容

常設展示「家に帰ろうー小林村の物語」のねらいは、八八水害という未曾有の災害により、その生活に急激な変化を強いられた小林村の、過去から現在に至るまでのことを記録し、表現することにある。過去と現在の生活様式の違い、彼らの復興にむけた歩みを示すことによって、来館者にこの災害について多角的な視点で考えるヒントを提供すると同時に、平埔族の存在そのものを考え直す機会をつくり出そうというねらいがある。

この展示は、4つのコーナーで構成されている。「記憶の中の家:小林村」と名付けられた最初のコーナーでは、ジオラマによって、村の主要道路である忠義路の災害前の様子や生活場面を再現しているほか、かつての生活の記憶を口頭で伝える映像、伝統の工芸や生活道具、および「太祖」信仰などの旧小林村の景観と生活を展示している。

「消えた家:水害によるキズ」という次のコーナーでは、最初のコーナーに比べると、展示空間はかなり狭い。ここでは、八八水害当日のテレビニュース、新聞報道などが紹介され



写真 3. 刺繍



写真 4. 災害



写真 5. 災害



写真 6. 仮設住宅



写真 7. 復興

ている。展示スペースは大きくはないが、災害が発生した要因について、見学者自身が考える仕掛けがとり入れられている。地質や雨量といった自然的要因だけでなく、政府や民間でおこなってきた土地の整備工事や山林開発といった、災害発生の社会的要因も示めされている。

次の「仮設住宅での生活」と題されたコーナーでは、被災した小林村住民たちの仮設住宅での生活から、3つのコミュニティに分かれて恒久住宅へ入居するに至るまでの経緯をパネル展示、映像、模型で表現している。小林村の住民たちは「新しい住居がどこになるのか、

生活していくために何かできるのか、伝統行事をおこなう空間があるのか」など、新しい生活を送っていくために、様々な不安をかかえていた。このコーナーの展示には、村民たちが自分たちにとってよりよい生活環境を作るために、建築士と何度も検討を重ねてきた過程も示されている。

展示を締めくくるのは「マイ・ホームと新生活」というコーナーである。人々が新しい生活に向かって、生業活動の再建、伝統文化の再興・継承などに従事する様子が写真を通じて紹介されている。そして、エピローグでは、未来へ向かう村人たちの笑顔の写真が飾られている。

これら4つの展示コーナーのほか、博物館から1キロほど離れた楠梓仙溪の対岸には、かつての小林村を眺めることのできる公園が整備された。また、小林村跡には記念碑に加えて、一世帯分ずつ黒い石を置き、木を植えて、目に見える形で1つの村が失われた現実を示すと同時に、八八水害を見学者が深く胸に刻むための工夫もされた。

6. 博物館収蔵品と刺繍工芸の再興

小林平埔族群博物館の常設展示には、刺繍の施された布や装身具が展示された。刺繍は昔のタイヴォアン人が伝統的に受け継いでいた仕事であり、生活環境に根差した模様を取りこまれた手工芸である。しかしながら、外部との接触が頻繁になり、服装の様式が変わりつつある中で、刺繍は50年ほど前に途絶えてしまった。現在、博物館に収蔵されている刺繍工芸品からみると、昔のタイヴォアン人はよく刺繍が施された布を、さらに黒や紺色の生地縫い付けて、頭巾、上着、帯、肩掛けや袋を作っていたことが分かる。刺繍の柄には繊細で多彩な花柄をはじめ、山の模様や幾何学の模様などもある。それらの模様を表現するために、タイヴォアン人は赤、青、緑、紫、黄色などの糸をよく用いた。

小林平埔族群博物館の常設展示の開設に先立ち、2011年の6月～9月の間に、高雄市の文化局は予算を計上し、財団法人台湾発展研究院に依頼して、旧小林村の人々が新しく暮らし始めた五里埔小林コミュニティと日光小林コミュニティにおいて、「五里埔恒久住宅基地の文化創意産業再建計画」というものを立案、実施した。この計画の目的は、伝統文化のオリジナリティを残したままでの産業化を進め、コミュニティの住民の生活手段として確立させることにある。この計画の参加者である旧小林村の人々に対する研修プログラムには、タイヴォアン文化全般や伝統祭礼に関する理解の深化、刺繍と木彫などの手工芸品製作技術の体得、地方独特の郷土料理のレシピ開発などが含まれた。

そして、同年10月9日夜祭の当日は、五里埔恒久住宅基地の広場にブースを設置し、郷土料理、刺繍製品や加工された農産品など、研修によって習得した成果を人々に披露された¹²。こうした展開を通して、刺繍の技術がもつ産業化の可能性が広く認められるようになった。

2014年、高雄市杉林区の日光小林コミュニティ発展協会は労働部の短期就労援助案（多

¹² 「找回記憶中的的小林—五里埔永久屋基地文創産業重建計畫成果展」

<http://wlprb.pixnet.net/blog/post/81611221-%E6%89%BE%E5%9B%9E%E8%A8%98%E6%86%B6%E4%B8%AD%E7%9A%84%E5%B0%8F%E6%9E%97-%E6%88%90%E6%9E%9C%E5%B1%95> (2016年11月23日に参照)。

元就業開発方案)により、刺繍の工芸品の製作技術習得のための短期間研修を実施した。この時、人の紹介で台湾原住民族のアミ族の人を教師として招いた。そして、同年8月4日小林平埔族群文物館の常設展示が正式にオープンされた。

小林平埔族群文物館の常設展示がオープンする以前、高雄市立歴史博物館の要請により、国立台湾大学の人類学科に収蔵されているタイヴォアン人の頭巾と肩掛けが五ヶ月にわたり小林平埔族群文物館に展示されていたことがある。しかしながら、コミュニティ協会の文化復興の担当者は、その資料の確かな重要性を認識せず、資料を再建計画の研修などに組み入れることをしなかった。だが、同館の常設展示に合わせて出版された『針線下的繽紛:大武壠平埔衣飾與刺繍藏品図録』(胡 2014)¹³が興味をもっている村民に配布されたことをきっかけとして、そこから図録に掲載された台湾の博物館に収蔵された刺繍工芸品と刺繍工芸についての強い関心が寄せられるようになった。当時、五里埔小林コミュニティに在住のMさんは図録に載せられた刺繍用品の模様を模倣し、自分で模索しながら、いくつの刺繍布を完成させている。

翌2015年7月～9月にかけて、小林平埔族群文物館が主催し、隣接するコミュニティセンターを研修の会場にして、タイヴォアンの伝統工芸とされる刺繍を伝承するための研修会がおこなわれた。その際、同館が管理機関である高雄市立歴史博物館に予算を計上して、今度は刺繍の技術を身につけているブヌン族の原住民族の工芸伝承者を刺繍の教師として招いた。

研修の目的は、刺繍の技術を習得するとともに、刺繍を施した布小物のデザインや製作を目指すことにあった。研修は、『針線下的繽紛:大武壠平埔衣飾與刺繍藏品図録』という図録を基に進められた。この本に収録されている刺繍工芸品は、いくつかの台湾の博物館に収蔵されているタイヴォアンの特徴を確実に伝える刺繍布や装身具である。この研修で、受講した旧小林村民によって製作された刺繍工芸品は同年10月に五里埔小林コミュニティでおこなった伝統行事の夜祭に合わせて、小林平埔族群文物館で展示されることになった。

このとき、刺繍研修に参加し、技術を習得した数人の村民は、臨時展示会場の設営も積極的に手伝った。夜祭の前日、文物館のスタッフと彼ら村民たちは近隣の山まで行って、会場を設営する際に必要な竹、藤やバナナの葉っぱなどの植物の素材を自分たちで集めてきた。中でも刺繍の作品を出展した3、4人は、自分たちの作品を飾る机の上にバナナの大きな葉っぱを敷いて、作品の配置を考えながら、展示のレイアウトを工夫した。そのときの臨時展示場では、村民たちが主体的に刺繍作品の配置を考えた会場作りをおこなったほか、来場者に対して自らの刺繍作品の説明を熱心におこなった。

こうした刺繍技術の研修、展示の企画、および博物館資料の図録、収蔵資料の利用を通じて、現在の小林村民の刺繍工芸技術は新たに再生された。コミュニティ内部のみならず、コミュニティ外部からも、刺繍工芸には高い評価が与えられるようになった。

7. 考察

¹³ 小林平埔族群文物館の常設展示を開設するとともに、出版された図録である。国立台湾大学人類学科の胡家瑜教授は高雄市立歴史博物館の依頼を受け、各博物館に現存しているタイヴォアン式の服装を調査し、『針線下的繽紛:大武壠平埔衣飾與刺繍藏品図録』を編集した。

以上、本稿では、八八水害と、その被災地となった旧小林村に焦点をしばって、博物館としての災害後の動き、および復興への関与について記述してきた。ここではこうした動きの中において、注目すべき点について考察を進める。

第1に、八八水害以前の1999年に発生した921大地震以降、台湾の各博物館は文化財の救出や自然災害に関する特別展示の企画といった活動が活発におこなわれるようになった。災害後の文化財救出に取り組むという経験によって、「モノと記憶の関連性」、「日常生活に使用するものの意義」、「オーラルヒストリーとなるインタビュー調査の重要性」などといった一連の動きに気づき、被災地域に残ったモノを利用することにより、一度は破壊されたかに見える現地の地域住民のコミュニティ意識の再構築に大きく貢献出来ることが分かった(王2003:145-154)。

一方、呉(2006)の研究により、921大地震の後におこなわれた文化財や生活道具の救出に関する動きには、何を収集するか、収集されたものをどう分類するかなどといった博物館が担うべき仕事が、キュレーターや研究者によって、いわば一方的に取り決められていった。そして、たとえば展示を企画する際には、被災した現地の住民も参加はしたものの、それ以前の収集過程において、まず現地住民の考え方が十分に反映されていないと指摘された。したがって、今後モノによる921大地震前後の歴史的存在の再構築や、また以前の生活様式の復元をしようとする際には、博物館側と被災地の地域住民との間で、解釈の方向に影響、または摩擦が生じると考えられる。

第2に、2009年の八八水害の後に建てられた小林平埔族群文物館では、被災した村民に、展示内容の企画立案の初期段階から参画してもらうことによって、村民の思いを表現した展示を実現することができた。

当初の文物館の最初の設立構想では、平埔族文化の再興を目指すことと台風災害を深く記憶に刻むことの2つが使命とされた。しかし、高雄市立歴史博物館が実施した被災者へのインタビュー調査では、多くの村民から昔みなで一緒に送っていた生活が懐かしいという意見が寄せられたことから、この結果に基づいて、キュレーターは、3つに分散されてしまった旧小林村の村民たちの「家」への思いを、展示を貫く1つの理念として据えた。そして、旧小林村の主要道路であった「忠義路」、消えてしまった村、新しく建てられた恒久住宅と、新居住地で根を下ろすまでの過程を示した。その結果、他の国立博物館の災害に関する企画展示に比べると、小林平埔族群文物館は地元住民たちの故郷に対する思いを重視した展示構成となっている。

それでも展示にはまだ村民の語りや思いが取り入れられなかった部分もある。たとえば、展示の2つ目のコーナー「消えた家:水害によるキズ」で展示しているのは、部外者による八八水害に関する記述、報道、および災害の原因に関する解説である。災害事件の発生後、政府側による災害の原因について説明は「地質や開発によって山崩れがおこなった」というものであった。一方、被災した楠梓仙溪沿岸の各村の住民と、専門の学者は他の原因を主張していた。

このような状況を踏まえて、博物館は政府側の見解だけでなく、複数の部外者による説明も同時に展示パネルとして示すことにより、来館者が自らの頭で考えるように誘う仕掛けを作った。キュレーターによると、災害に関する被災地内部の観点が取り込まれなかったもう1つの理由は、今回の大きな被害で家族や土地を失った悲しくつらい記憶を思い出した

くないという、心に傷を負った村民の意見を配慮したものだという（キュレーターA 2014. 8. 14）。

このように、小林平埔族群博物館のおもな展示は、村民の思いと、かつての生活・年中行事などを再現しながら、展示のストーリーラインを構成している。例えば、最初の展示コーナーでは、生き延びた人びとの語りと、古い写真、再現された生活道具などによって、村民個人レベルの過去の日常生活が記録に残された。一方、お寺の太鼓踊り（大鼓陣）と民俗芸能の活動である夜祭といった年中行事は、映像やアニメによって再現され、村の生活の共同体的な側面が表現された。

また、高雄市立歴史博物館のキュレーターは展示に際して専門的な解説を極力控えた。キュレーターによると、今後、現地住民に主体的に小林平埔族群博物館の展示企画に参加してもらうことにより、展示の更新はより容易になると考えられるという（キュレーターA 2014. 8.14）。このように、展示場は村民の情報発信とコミュニケーションの場にもなっている。

第 4 に、この小林村についても博物館の展示内容について改めて考察すると、同じ小林村に関する展示であっても、それぞれの時期による社会状況とニーズにより、展示内容は大きく変化してきているということが分かる。

水害前の 1992 年、シラヤ系タイヴォアン文化を次の世代に伝えるために、小林小学校に博物館が設立された。また、水害の後におこなわれた最初のタイヴォアン文化の展示は国立台湾博物館が企画したものである。次に、高苑科技大学の教授と学生たちによって、昔の生業道具をテーマとした展示がおこなわれた。これらの展示は、いずれも地方の生業とその文化を客観的に紹介するものであった。しかし、現在の小林平埔族群博物館の展示には、災害前の生活の様子を次世代に伝えるために、長老たちの語りや家庭の食卓の再現など、より主観的な情報を展示している。そのため、かつて生活経験を共有していた地元の人びとが、展示のストーリーラインに入り込みやすくなっている。つまりこの展示は部外者に向けたものでなく、地域住民を主なターゲットとした構成になっていると言える。

第 5 は、小林村の村民たちが歩んできた災害後の文化復興プロセスの中で、外部の研究者と博物館キュレーターが重要な役割を担ったという事実は注目すべき点である。たとえば災害後、研究者はタイヴォアン文化の伝承の必要性を認識したうえで、研修を企画し、実施した。または博物館のキュレーターは展示内容を企画するため、分散して居住していた旧小林村の村民の意見をまとめた。さらに、タイヴォアンの刺繍工芸を再興するため、研究者は博物館の刺繍資料の分析を進めてきた。この研究に関する段階的な成果である『針線下的續紛:大武壠平埔衣飾與刺繍蔵品図録』を作成したことにより、台湾における各博物館や文化的機構に収蔵されたタイヴォアンの刺繍資料の情報が公開された。そこで、タイヴォアンの刺繍工芸を文化再興の手段のひとつになると考え、刺繍技法の研修を年に一度のペースで実施してきた。こうした過程においても博物館資料が文化復興の資源としての役割を果たしたと考えられる。

第 6 には、小林村の住民による刺繍技術の復活から博物館への出展できるようになるまでのプロセスからは、小林村における文化復興の担当者と、実際に刺繍の技能を身につけた実践者は、刺繍工芸を自らの伝統文化として認識し、習得することにより、民族意識の高まりが生じていることが明らかになった。このように、小林村の村民たちは、博物館に収蔵された刺繍資料や、他部族の人から習得した技術、出版物などを手がかりとして懸命に刺繍工

芸を再興しようとした。その結果として、刺繍工芸品の臨時展示会を開催するまで着けた一連の動きは、博物館に収蔵された資料が文化復興の動きに役立つ伝統的資料であり、現在につながる一部なのだと認識した。

8. おわりに

本稿では、災害後の復興における博物館の関与について、921大地震を契機として、特に八八水害に着目し、災害後、新たに建設された小林平埔族群文物館と被災地である小林村の村民との協力関係と、災害を契機としてタイヴォアンの人びとが、自発的に自らの文化を再生しようとしたことに着目して考察した。

1999年の921大地震の後、博物館の収蔵と展示といった機能を通して、自然災害への認識、被災者の歴史・記憶の記録、および地域住民のコミュニティ意識を再形成することができることが認識された。このことから学んだ新たな動きとして、八八水害の後、高雄市立歴史博物館と旧小林村の村民との協力関係が生まれ、また新たな博物館展示の企画手法につながった。そこで、博物館は文化・歴史の記録者という第三者的立場からもう一歩前に踏み込み、地域住民と協働作業をすることで、生活復旧と文化伝承という役割の一翼を担うことができた。

さらに、小林村の村民たちは国内の各博物館の収蔵品を参考しながら、刺繍の技法を新たに学び、また刺繍をほどこした布小物などを再現した。このように、刺繍の工芸品が現地の人びとの記憶のなかに閉じ込められたままやがて消滅していくのではなく、博物館と現地の人びととの相互協力によって現代に再現されることにより、民族アイデンティティの形成とその技術が次の世代へと継承されることとなった。刺繍の工芸品の再創造および村民たちの実践のプロセスといった動きは、博物館と地域との連携による文化復興において重要な役割を果たしたと考えられる。

謝辞

本研究は平成27年度笹川研究助成「文化アイデンティティの形成と博物館の衣装収蔵品の活用に関する博物館人類学的研究—台湾の平埔族のシラヤ（西拉雅）族を事例として」による。

参考文献

(日本語)

簡文敏

2010「小林平埔族文化と災害後の再建」『台湾原住民研究』14:35-54。

小池淳一、葉山茂

2012「民家からの民具・生活用具の救出活動—宮城県気仙沼市小々汐地区—」国立歴史民俗博物館(編)『被災地の博物館に聞く—東日本大震災と歴史・文化資料』、pp.206-241。

日高真吾

2011 「東日本大震災における被災文化財の救援の現場から—有形民俗文化財の支援を中心に」『民博通信』135:2-7。

2014 「文化財レスキュー活動の現在—保存科学の現場から」『季刊民族学』148:13-17。

林清財

2011 「学者と災害—台湾小林平埔原住民族文化重建協会の試み」『Field+』6:28-29。

林清財

2015 「研究者と災害支援「台湾平埔原住民族文化学会」の誕生」『台湾原住民研究』19:187-198。

(中国語)

王嵩山

2003 『差異、多様性與博物館』、稻郷出版社。

2012 「地震物件、行動者與社會:臺中東勢匠寮巷的例子」『博物館與文化』臺北市:臺北藝術大學、pp.195-232。

行政院莫拉克颱風災後重建推動委員會(編)

2010 『莫拉克颱風災後重建周年成果彙編』臺北市行政院莫拉克颱風災後重建推動委員會。

吳延晃

2006 「災難下的物體系:九二一地震後物件博物館化的故事」『博物館學季刊』20(2):7-30。

李永裕

2010 「「小林平埔族群文物館」開館首展籌畫調查研究計畫」国立台湾博物館研究報告、未出版。<http://www.ntm.gov.tw/upload/download/20111026/0f8ffb2c-662e-4152-8704-3c207f8b3e7e.pdf> (2016年1月検索)。

胡家瑜編

2014 『針線下的繽紛:大武壠平埔衣飾與刺繡藏品図録』、高市史博館。

高雄市歷史博物館

2014 『回家—小林村的故事』展示ガイド。

陳叔倬

2013 「天然災難後臺灣各博物館的公共參與:以 921 地震與 88 風災為例」『博物館與文化』5:87-103。